

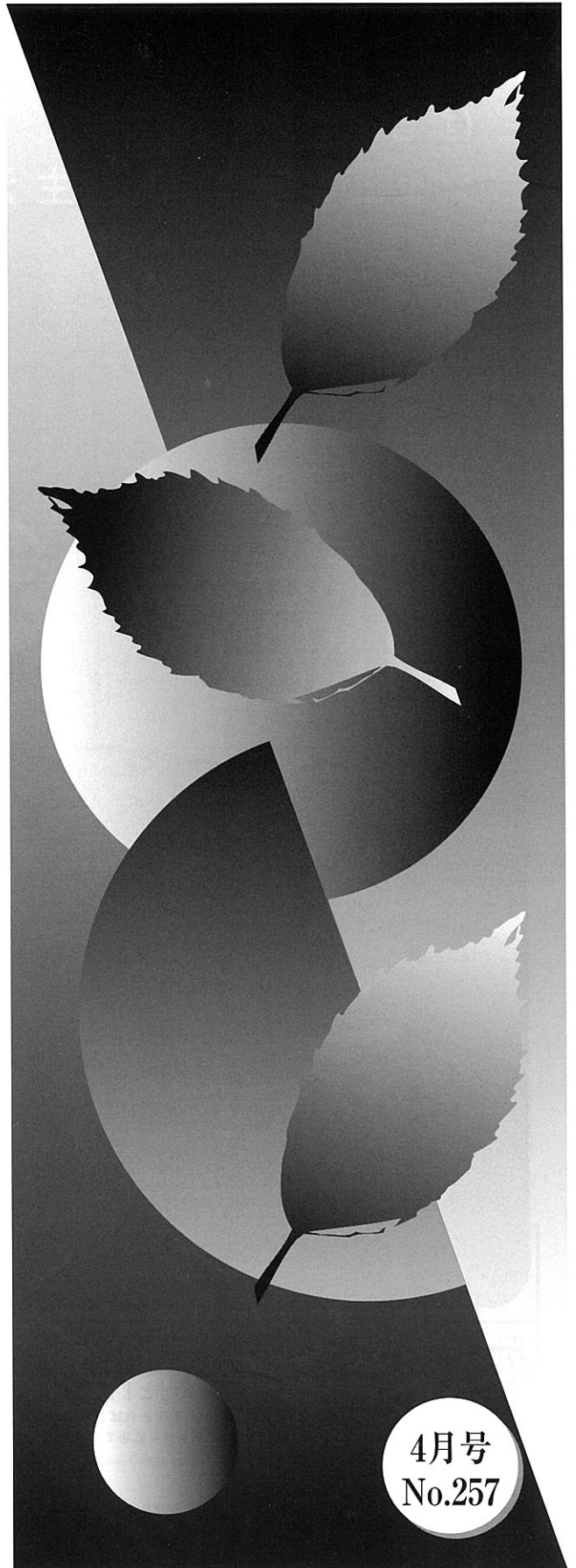
月刊

建材

ナビ

特集：高意匠・高断熱・高機能スライディング
ドアで新たな需要獲得を狙う
「住宅用玄関ドア／玄関引戸」

特集：都市再開発プロジェクトの本格化で
活気を取り戻すビル用「オーダー
規格トップライト・ドーム」市場



4月号
No.257

日本の「水道の父」と評される明治政府招聘の
顧問技師「バルトン銅像」の制作・設置を提唱

小松電機産業は、クラウド時代の地政学をプラットフォームに、クラウド総合水管理システム「やくも水神」、高速シートシャッター「happy gate 門番」、「人間自然科学研究所」の3つの事業を通じて「対立から共生の文化へ」の転換を提唱、創業50年を迎えようとしている。

小松昭夫社長は、これまでも「水の偉人」の顕彰活動を進めてきたが、今回は日本の「水道の父」とも評され、松江市の上下水道の基本設計にも携わった明治政府が招聘した顧問技師「ウィリアム・K・バルトン銅像」の制作・設置を提唱、賛同者を募っている。すでに2006年にバルトン生誕150年、来松江110周年を記念して、松江市の水がめ・千本ダム近くの忌部浄水場構内に顕彰碑の建立を行っている。

ウィキペディアによると、ウィリアム・K・バルトンは、1856年5月11日スコットランド・エディンバラ生まれ、1881年英国衛生保護協会の主任技師となった。渡欧中であった永井久一郎（永井荷風の父）の推薦を得て、明治政府の内務省衛生局のお雇い外国人技師として1887年（明治20年）に来日、東京市の上下水道取調主任に着任した。同時に帝国大学工科大学（のちの東京大学工学部）で衛生工学の講座をもち、台湾水道の父と評される浜野弥四郎など、何人かの著名な上下

水道技師を育てている。

バルトンの設計は帝都上下水道の基本計画

となり、東京、神戸、福岡、岡山、下関、松江など、全国23の都市の衛生状況の調査や上下水道の設計に関わった。松江市には、1895年（明治28年）7月23日に訪れ、探検調査し8月2日帰京。その後松江市に再調査を依頼し、1899年（明治32年）内務大臣に「サミズ泉を最上の水源地と選定」という調査結果を報告。このバルトンの調査が基礎となって松江市の近代水道が完成したといわれる。

そうした活動ぶりは、「バルトンは教育を通じて日本衛生工学を導入した第一人者で、日本の水道史上は勿論、衛生工学史上ももっとも功労のある人物」と評価された。日本での任期を終え1896年（明治29年）に当時の台湾に渡り、台北の上水計画を進めたが、炎暑の中で調査活動を重ねた末に風土病に罹り、1899年（明治32年）8月5日、43歳で死去。その墓所は故郷のスコットランドではなく、東京・青山霊園にある。松江市とも縁の深い「水の偉人」顕彰活動の一環として「バルトン銅像」の製作・設置が提案されている。

